

家庭環境で異なる 学校や勉強をめぐる中高生の意識

～「中学生・高校生の生活と意識調査2022」から③～

世論調査部 村田ひろ子

NHK放送文化研究所が2022年夏に実施した「中学生・高校生の生活と意識調査」の3回目となる今回の報告では、中高生と父母の学校や勉強をめぐる意識に焦点を当てる。

学校が『楽しい』と回答した中高生は約9割で、担任の先生とも良好な関係を築いている生徒が多い。父母の学校や先生に対する評価も高く、「教育者として熱心な先生が多い」と答えたのは、父親が約3割、母親が約5割で、過去最多となっている。

他方、生活水準が低いという世帯の親では、先生や授業内容について把握しておらず、学校への関心が薄い傾向がみられる。中高生自身についても、将来の生活程度の見通しは、生活水準が低いほど、同様に低くなる傾向があり、家庭環境によって思い描く将来展望が異なっている。

ただ、親が子どもに対して肯定的な見方をしているほど、子どもの学習意欲や将来への期待値は高い傾向があり、保護者の働きかけ次第では、不利な環境を克服できるかもしれない。

1. はじめに

NHK放送文化研究所（以下、文研）では2022年夏、中高生の年代にあたる子どもたちとその親を対象に、6回目となる「中学生・高校生の生活と意識調査」を実施した。調査の結果については、これまで2023年5月号で中高生のSNS利用と友人関係について、6月号でジェンダーをめぐる意識を中心に考察したが、本稿では、中高生と父母の学校や勉強への意識について取り上げる。

新学習指導要領に基づき、中学校では2021年度から、高校では2022年度から「探究学習」が始まり、予測困難な社会状況にあっても、自ら課題を見つけ、学んで、考える力を育む教育の実践がうたわれている。また、2021年度から本格的に始まったGIGAスクール構想のもと、

小中学生全員に1人1台ずつパソコンやタブレット端末が配備され、子ども1人1人にとって最適な学習内容を提供し、教育の質を高めようとする取り組みが行われている。高校でも、1人1台の端末を整備する方針が打ち出され、困窮世帯には、端末を貸与する支援策も講じられている。学校生活の面では、生徒指導のガイドラインにあたる「生徒指導提要」が2022年に12年ぶりに改訂され、行きすぎた校則の見直しなど、子どもの権利をより重視する内容が盛り込まれた。

このように、中高生を取り巻く学習環境は近年大きく変化しているが、家庭が負担する教育費に目を向けると、家計負担の割合が高い状態は2000年代初めからほとんど変わっていない¹⁾。日本では、高等教育費に占める家計負担の割合が5割強と、経済協力開発機構

(OECD) 加盟国の平均と比べて高く、家計に教育費が重くのしかかっている。2021年度の文部科学省の調査によれば、学校や塾など、保護者が子ども1人の学習にかける年間の費用は、公立の中学校で50万円を超えて、調査を開始して以降過去最高を記録している²⁾。そのうえ、多くの子育て世帯が、コロナ禍や物価高騰の影響を受けている。

保護者の教育費の負担が重い日本社会で、家庭環境によって子どもの勉強への態度や将来への見通しは、どのように異なるのだろうか。また、中高生を取り巻く教育環境が様変わりする中、中高生と父母は、学校や勉強についてどのような考えをもっているのだろうか。10年ぶりに中高生と父母を対象に実施した世論調査の結果から、学校や勉強をめぐる中高生と親の意識についてみていく。

調査の概要は以下のとおりである(表1)。単純集計結果およびサンプル構成は、本誌2023年5月号、あるいは文研のウェブサイト³⁾を参照されたい。

表1 調査の概要

調査目的	中学生・高校生の年代の子どもたちの意識や実態を探るとともに、それぞれの父母にも、親から見た子どもの姿や、親としての考えを聞き、意識の違いを把握する。	
調査時期	2022年7月19日(火)～8月31日(水)	
調査方法	郵送法	
調査対象	全国の12～18歳	全国の12～18歳の父母
調査相手	住民基本台帳から層化無作為2段抽出1,800人(12人×150地点)	生徒調査の調査相手1,800人の父母(父か母がいない場合も含む)
調査有効数(率)	1,183人(65.7%)	父親1,031人(57.3%) 母親1,197人(66.5%)
	中学生596人 高校生556人	

※父母調査では、調査用紙に「質問にてくる『お子さん』は、封筒のあて名のお子さんのごことです」という注意書きを添え、調査相手として選ばれた子どもについて回答してもらうよう依頼した。

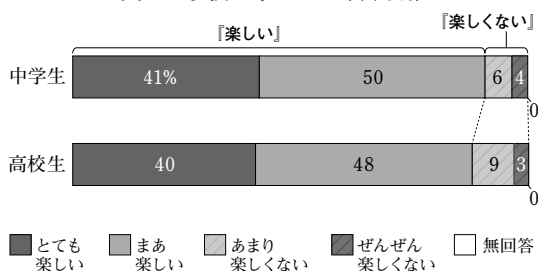
なお、2022年と2012年以前の調査とでは調査方法が異なる⁴⁾ため、単純に比較することに問題がないとは言えないが、経年変化の大きな特徴をとらえるため、回答の割合が大きく変わったものや、回答傾向に変化がみられなくても特筆すべき結果を中心に、適宜言及する。

2. 中高生の学校生活

学校が『楽しい』中高ともに約9割

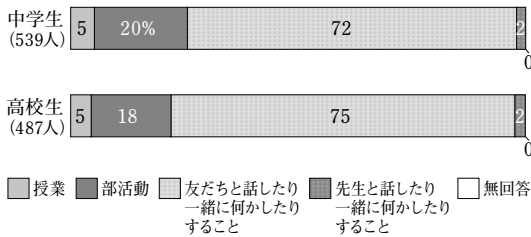
中高生に対して、「学校は楽しいか」と尋ねた結果、『楽しい(とても+まあ)』は、中学生90%⁵⁾、高校生88%といずれも約9割にのぼり、大多数を占める(図1)。

図1 学校は楽しいか(中高別)



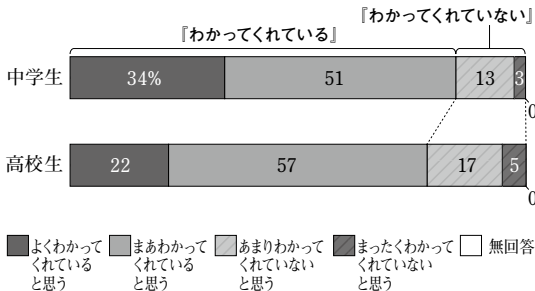
学校が『楽しい』と考える中高生が、圧倒的多数を占めるのはなぜなのだろうか。学校が『楽しい』と回答した人に、一番楽しいことを4つの選択肢から選んでもらったところ、最も多いのは「友だちと話したり一緒に何かしたりすること」で、中学生では72%、高校生では75%と大多数である(図2)。次いで「部活動」が中学生で20%、高校生で18%などとなっている。多くの中高生が学校を楽しんでいる背景には、友だちと過ごしたり、部活動に打ち込んだりする時間が充実していることがあるのではないだろうか。

図2 学校で一番楽しいこと
(学校は『楽しい(とても+まあ)』と回答した人, 中高別)



学校生活を楽しんでいると考える中高生が多い背景について、さらにほかのデータもみてみる。担任の先生が、自分のことをわかってくれていると思うかどうかを尋ねたところ、『わかってくれている(よく+まあ)』は、中学生が85%、高校生が78%で、中高ともに多数にのぼる(図3)。中高生たちが学校を楽しんでいるのは、担任の先生と良好な関係を築いていることもあるのではないだろうか。

図3 担任の先生はわかってくれていると思うか
(中高別)



ここまで、多くの中高生が学校生活を楽しんでいる様子が見えてくるデータを見てきたが、一方では、学校が楽しくないと回答した生徒もおよそ1割いることには留意すべきであろう。近年、不登校の子どもは増加傾向にあり、特に中学生では、2022年度に19万3,936人と調査を始めてから過去最多となっており、割合も6%

となっている⁶⁾。調査対象の全学校が把握した2022年度のいじめの件数も68万件を超えて、調査開始後過去最多となっている⁷⁾。2013年にいじめ防止対策推進法が施行されてから10年、学校ではいじめを早期に発見しようとする動きが広がっているものの、深刻ないじめはあとを絶たない。中高生調査の結果をみても、「この1年くらいの間、友だちにいじめられたことがある」と回答した生徒は、中学生で8%、高校生で4%いる。また、「SNSでの悪口や嫌がらせ」についても、中学生で5%、高校生では7%が経験している。

2023年5月に新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが変わる中、コロナ禍による学校行事や部活動の制限が解消され、学校現場も徐々に以前の状況に戻りつつあるが、子どもたちが過度なストレスを感じていないか、人知れず深刻な悩みを抱えていないか、学校や家庭、地域などで、引き続き不安定な心理状況に留意する必要があるだろう。

学校の校則は『厳しいほう』 中高ともに減少傾向

近年、全国の学校でいわゆる「ブラック校則」が注目を集める中、生徒指導のガイドラインにあたる「生徒指導提要」が2022年に12年ぶりに改訂され、行きすぎた校則をなくすために、学校のホームページなどで校則を公表し、制定の背景や見直しの手続きも示すことなどが盛り込まれた。

当の中高生たちは、学校の校則については、どう感じているのだろうか。調査では、学校の校則が、厳しいほうだと思うか、それとも自由なほうだと思うかを尋ねている。中高別にみると、中学生では『厳しいほう(「どちらかといえ

図4 学校の校則は厳しいと思うか
(中高別)

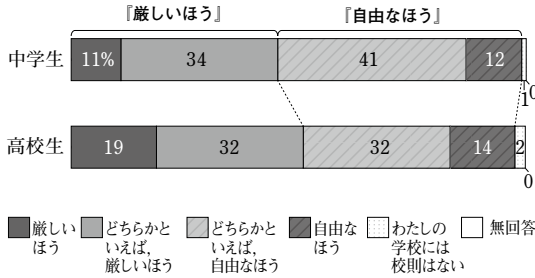


図5 学校の校則は厳しいと思うか
(男女別)

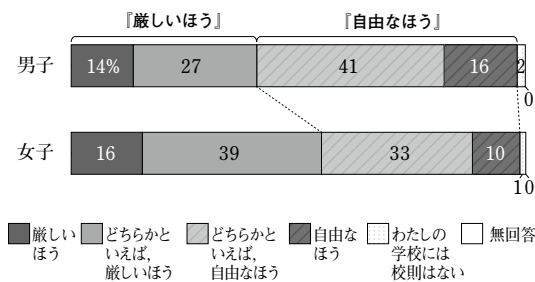
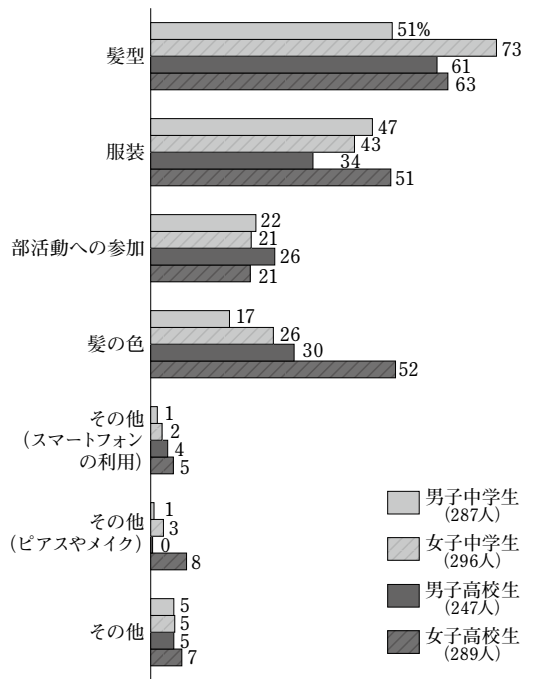


図6 生徒の自由に任せてほしいもの
(複数回答, 男女中高別)

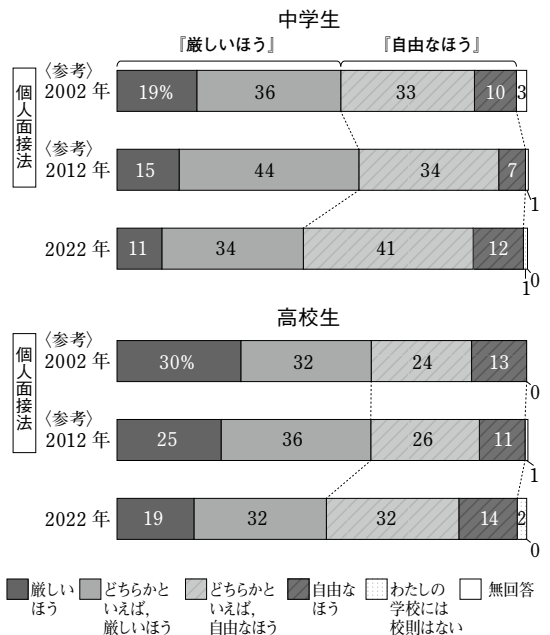


ば」を含む』が45%, 高校生では51%で、いずれも半数程度を占めている(図4)。

男女別にみると『厳しいほう』は、女子(55%)のほうが、男子(41%)よりも多い(図5)。校則が厳しいと感じるのが女子で多いのは、女子では髪型や服装などについて、「校則で強制せずに、生徒の自由に任せてほしい」と感じている人が多いためだと考えられる。複数回答で尋ねた結果をみると、女子中学生では「髪型」を挙げたのが73%, 女子高校生では、「服装」(51%)や「髪の色」(52%)を挙げた人が多くなっている(図6)。

調査方法や選択肢が異なるため、単純に過去の結果と比較はできないが、中高ともに「厳しいほう」は減少傾向である(図7)。『厳しいほう(「どちらかといえば」を含む)』についても、2022年は、10年前や20年前の結果と比

図7 <参考> 学校の校則は厳しいと思うか
(中高別, 2022年は再掲)



※ 2002年、12年調査では「わたしの学校には校則はない」という選択肢は提示しなかった

べて減っている。こうした減少傾向は、全国的に「行きすぎた」校則に注目が集まる中、各校が校則を緩めたからなのか、マスコミやSNSで取り上げられる他校の厳しい校則に比べて、「自分の学校の校則はそこまで厳しくもない」と感じるからなのか、今回の調査結果から探るのは難しいが、いずれにしても校則に対する中高生たちの受け止めは、変わりつつあるようだ。

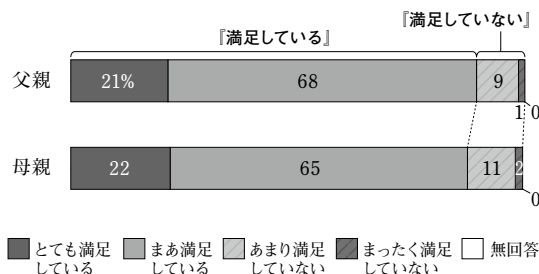
3. 父母の学校への評価

9割が学校に満足、高まる先生への評価

中高生の学校生活についてみてきたが、父母は、子どもが通う学校に対してどう思っているのだろうか。ここからは、父母の学校や先生に対する評価についてみていく。

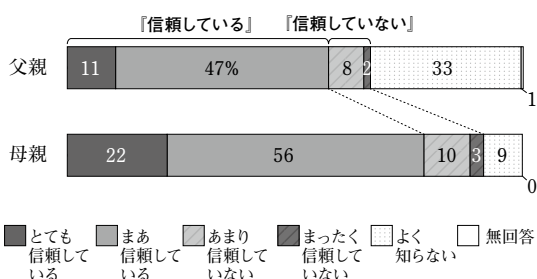
子どもが通っている学校に対する満足度を尋ねた結果、父母ともに「まあ満足している」が最も多く、父親が68%、母親が65%である(図8)。『満足している(とても+まあ)』は、父親で89%、母親で87%にのぼり、学校に対する親の満足度は高い。

図8 父母 学校への満足度



子どもの担任の先生に対する信頼度を尋ねた質問では、『信頼している(とても+まあ)』は、父親で57%、母親では78%にのぼる(図9)。

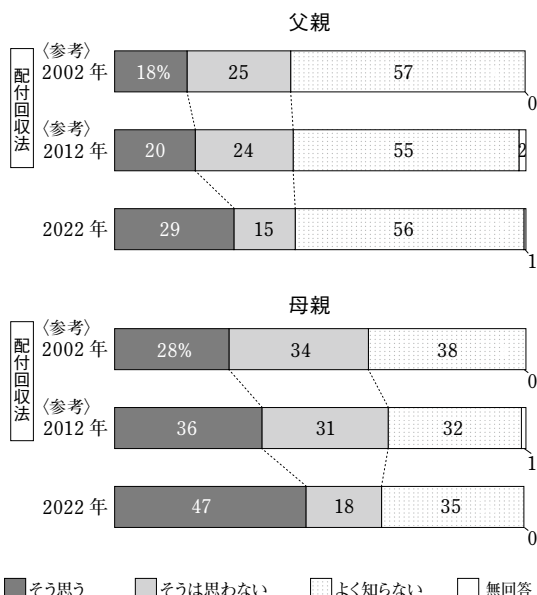
図9 父母 担任への信頼



父親では「よく知らない」という人が33%と3人に1人で、母親の9%を大きく上回っているが、いずれにしても、父母ともに先生を信頼している人が多数派となっている。

「教育者として熱心な先生が多い」と思う(そう思う)と答えた父母は、2022年調査では、父親が29%、母親が47%で、母親のほうが多い(図10)。また、父親では半数以上の56%が「よく知らない」と回答した。父親は、母親と比べて、子どもと学校や担任の先生について話を

図10 父母 教育者として熱心な先生が多いと思うか



する頻度が低かったり、授業参観の機会が少なかったりするためだと考えられる。

調査方法が異なるため、過去の調査と単純に比較はできないが、「教育者として熱心な先生が多い」に「そう思う」という人は、父母ともにこれまでで最も多くなっている。全国的に教員が不足する中、近年ではコロナ禍の授業のデジタル化や行事の変更への対応で忙しい学校現場において、「先生は一生懸命やってくれている」という意識が高まったのかもしれない。

学歴や生活程度により 親の学校への関心の程度に違いも

2022年の調査では、中高生の父母が、学校や子どもの教育にどの程度関与しているのかを探るために、「子どもの学校行事に、どの程度参加しているか」を尋ねる質問を新設した。母親では、「ほぼ毎回参加している」が49%と最も多かったのに対して、父親では12%にとどまる(図11)。「参加している(ほぼ毎回+ときどき)」は、母親では80%にのぼるのに対し、父親では44%と半数に届かない。

次に、学校行事への参加頻度が高い、母親にしぼって結果を詳しくみていく。就業形態別にみると、「参加している」は、専業主婦で87%にのぼり多くなっているが、仕事をもって

いる人でも、フルタイム勤務が81%、パートタイム勤務が80%となっていて、仕事の有無や勤務状況にかかわらず、多くの母親が子どもの学校行事に参加している。また、子どもが一人っ子か否かによる違いはなかった。

それでは、母親の学歴や家庭の生活水準による違いはあるのだろうか。母親の学歴別にみると、『参加している』は、学歴にかかわらず約8割を占めていて差はないが、「ほぼ毎回参加している」にしぼってみると、『中・高卒』の母親が44%で半数を割っているのに対し、『大学・院卒』では57%と6割近くとなっていて、高学歴の母親で学校行事への参加頻度が高い(図12)。

生活程度の質問への母親の回答をもとにした分類別⁸⁾、『参加している』の割合をみると、『上』が83%で、『下』の72%より多く、生活に余裕のある家庭の母親のほうが、学校行事に参加している割合が高い。

学校行事への参加は、育児や介護を含む家

図11 父母 子どもの学校行事に参加しているか

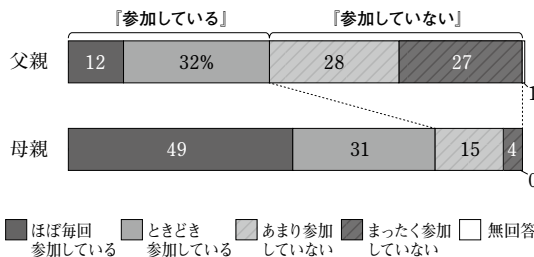


図12 母親 子どもの学校行事に参加しているか
(学歴別・生活程度別)

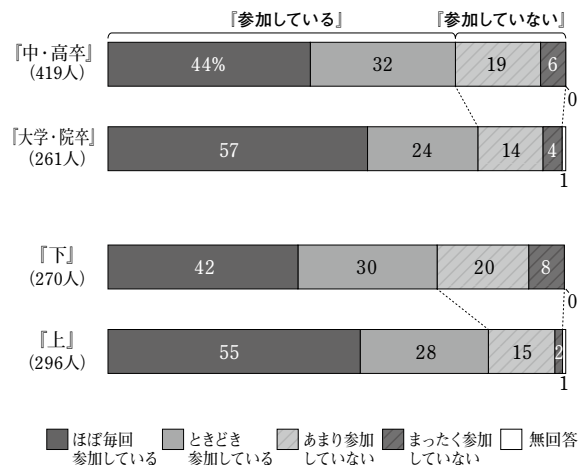
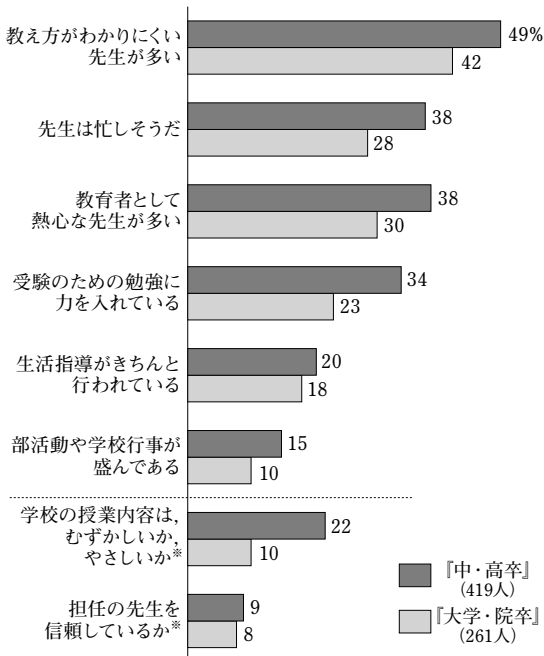
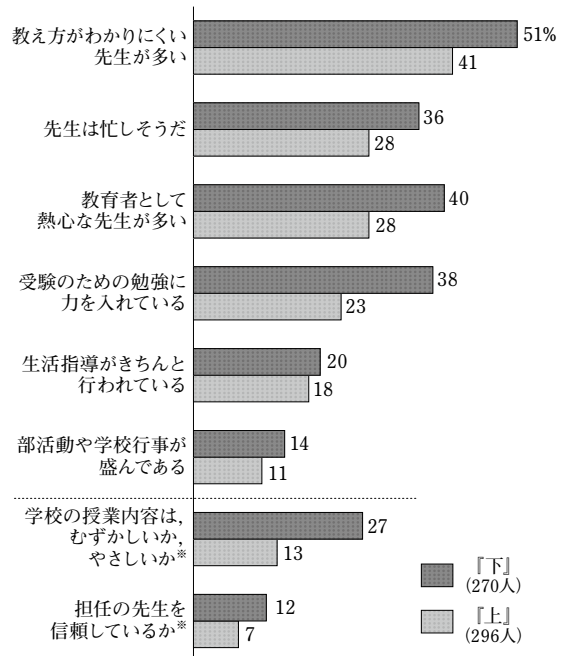


図13 母親 学校や担任への評価で「よく知らない」と回答した割合 (学歴別)



*がついている項目は、選択肢が異なる質問

図14 母親 学校や担任への評価で「よく知らない」と回答した割合 (生活程度別)



*がついている項目は、選択肢が異なる質問

族の世話や、仕事の忙しさなど、その人が置かれた状況に左右される面もあるが、一方で、子どもの教育に関わろうとする「意欲」のバロメーターとも考えられるのではないだろうか。学歴や生活程度の違いによるこうした教育意欲の差は、次に述べる学校への関心についての結果からも読み取れる。

図13の学校や担任の先生について尋ねた項目で、「よく知らない」と答えた母親の割合を学歴別にみると、『大学・院卒』よりも、『中・高卒』で多い傾向がある。同様に生活程度別にみると、家庭の生活程度が『上』よりも、『下』と回答した人で多い傾向がみられる(図14)。「よく知らない」というのは、関心がないことの裏返しとも言えるが、学歴や生活水準によって、

学校への関心が高まることの方があがる。

TIMSS (=国際数学・理科教育動向調査)⁹⁾ などについて詳細に分析した専門家によると、家庭の所得や父母の学歴など、いわゆる社会経済的地位が高い親は、「子に学校での学習について頻繁にたずねる『意図的養育』を行う傾向にあるといえる」¹⁰⁾。親が学校での勉強や成績を気にかけていることが子どもに伝われば、自ずと子どもの勉強への動機づけにつながり、学習意欲も高まる。社会経済的な差が、親の学校への関心の差につながり、それが子どもの勉強意欲にも影響している可能性がある。

学校への関心は、都市化の違いによる地域社会の人間関係の強さも影響すると考えられるが、今回の中高生調査の結果からもそのような

特徴がみられるのだろうか。

都市規模別に母親の「学校行事への参加」についてみると、都市規模にかかわらず『参加している』割合は8割前後で、差がない。また、学校や担任への評価についても、都市規模による顕著な違いはない。今回の調査結果をみる限り、親の学校への関心を測る項目については、都市規模による違いはみられないが、中高生自身の進学意向についてはまた異なる傾向があるため、次章で詳しく述べる。

4. 進学意向や将来展望の背景

(1) 進学意向と勉強時間

親の学歴や生活程度が高いほど多い
『大学・大学院まで』めざす中高生

ここからは、中高生たちの勉強に向き合う姿

勢や、思い描く将来展望が、親の学歴や生活程度によって、どの程度異なるのかを検証する。

進学最終目標についてみると、中高生とも「大学まで」進学したいという生徒が最も多く、中学生が45%、高校生が57%である。「大学院まで」を合わせると、中学生で47%、高校生では63%を占める。

父母の学歴別にみると、『大学・大学院まで』は、父親が『大学・院卒』の子どもでは70%にのぼるのに対し、『中・高卒』では43%にとどまる(図15)。母親が『大学・院卒』の子どもでも73%にのぼり、『中・高卒』の40%よりかなり多い。

父母の回答に基づく生活程度別にみると、『大学・大学院まで』は、父親の生活程度が『上』の子どもでは66%なのに対し、『下』では42%にとどまる(図16)。また、母親の生活程

図15 中高生の進学最終目標(父親の学歴別)

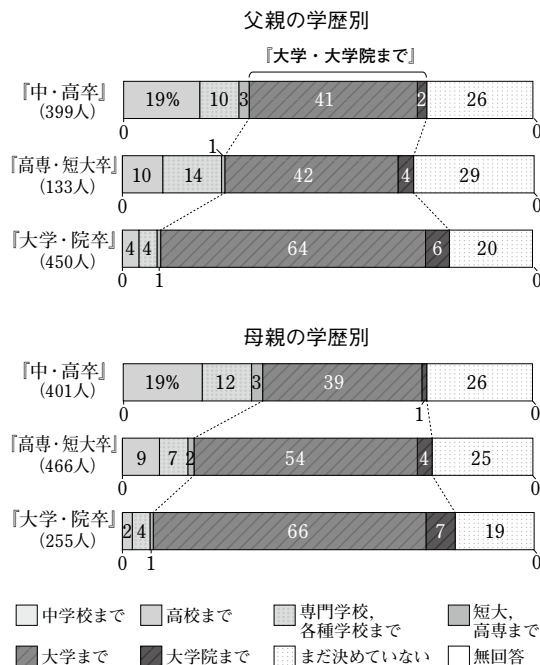
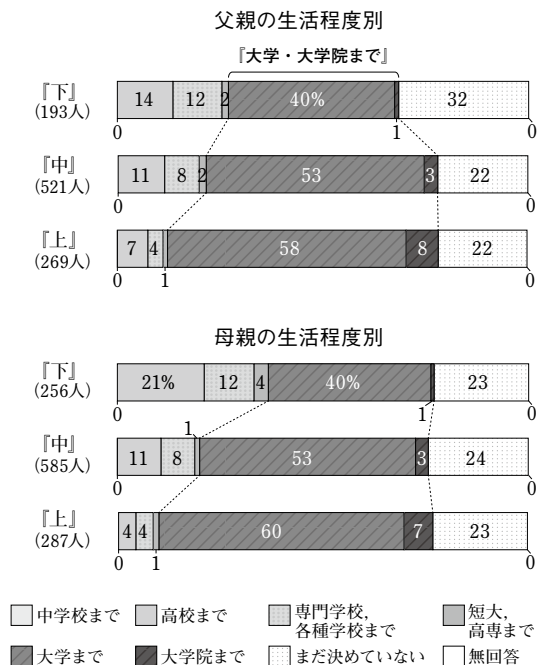


図16 中高生の進学最終目標(父親の生活程度別)

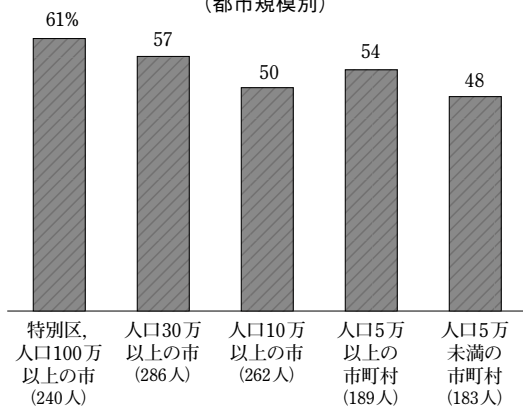


度が『上』の子どもでは67%なのに対し、『下』では40%にとどまる。

さらに、大学進学に影響を与える要因として、大学は大半が都市部にあり、地方出身者は、都市部に比べて進学のコストがかかる点が挙げられる。大学の都市部への偏在は、大都市と地方の格差の1つであり、高等教育を受けた人材の都市部への集中が、その差がなかなか埋まらない背景の一部と指摘されている。

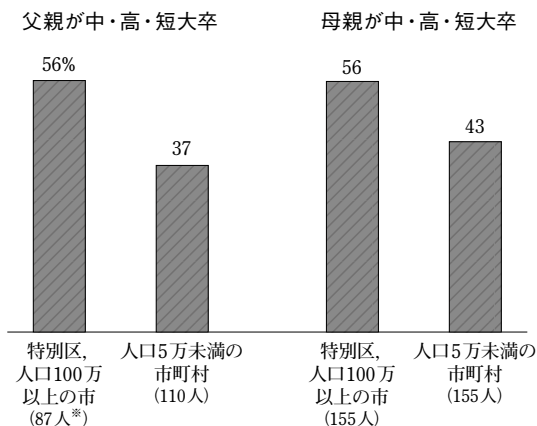
中学生調査の結果から、『大学・大学院まで』の志望者を都市規模別にみると、「特別区、人口100万以上の市」では61%にのぼるのに対し、「人口5万未満の市町村」は48%と半数に届かない(図17)。

図17 中学生の進学の最終目標：『大学・大学院まで』(都市規模別)



都市規模が大きいほど、大卒の父母の割合が高くなるため、親の学歴の影響を取り除くために、回答数がある程度そろそろ『中・高・短大卒』の父母の子どもにしぼって結果をみしてみる。『大学・大学院まで』を志望する中学生は、「特別区、人口100万以上の市」では半数以上を占めるのに対し、「人口5万未満の市町村」では4割前後と少ない(図18)。親の学歴をある程度

図18 中・高・短大卒の親をもつ中学生の進学の最終目標：『大学・大学院まで』(都市規模別)



※回答数が少ないため、参考値

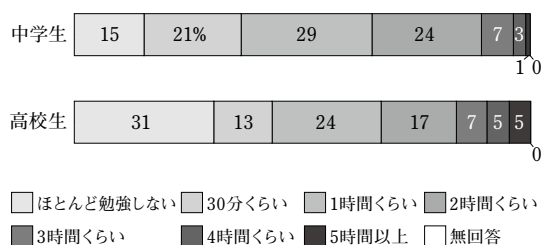
そろえても、住んでいる地域によって大学進学を志望する割合に違いがあることがわかる。

2000年代に入ってから「子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるのがよい」と考える人が、三大都市圏で非三大都市圏よりも多くなっていることをふまえ、「2000年代以降は階層だけではなく地域についても教育熱格差がある」状況となり、そして結果的に、地域格差の拡大につながっているという指摘もある¹¹⁾。また、大卒者を雇用する企業が、都市部で多いことも地方格差を広げる要因になっているという。教育への意識の違いは、家庭環境だけでなく、住んでいる地域の違いからも生まれているようである。

父母の学歴が高い中学生で長い平均勉強時間

平日(夏休みなど学校が休みの日は除く)に、家や学習塾など学校以外のところで、勉強を1日平均何時間くらいしているかを尋ねた。中高別にみると、「ほとんど勉強しない」人は、高校生が

図 19 学校外の勉強時間（中高別）



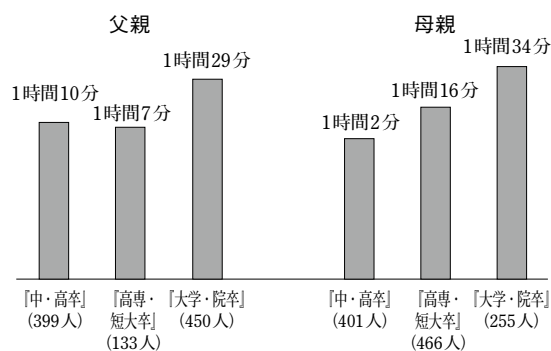
31%と、中学生の15%を上回っている（図19）。

参考までに、選択肢を時間に換算し、「ほとんど勉強しない」を0分、「30分くらい」を30分、「1時間くらい」を1時間とし、「5時間以上」を5時間として、勉強時間の平均を中高別に算出したところ、中学生は1時間14分、高校生では1時間16分となる。

親の学歴別にみると、平均勉強時間は、『大学・院卒』の父母をもつ中高生で長い傾向がある。父親が『中・高卒』の人では1時間10分なのに対し、『大学・院卒』では1時間29分、母親が『中・高卒』の人では1時間2分なのに対し、『大学・院卒』では1時間34分である（図20）。

また、父母の生活程度別にみると、父母とも

図 20 中高生の平均勉強時間（父母の学歴別）



に生活程度が『上』の場合の勉強時間はおよそ1時間半なのに対して、『下』の場合は、およそ1時間と短い。

父母の学歴や生活水準が高い中高生ほど勉強時間が長い理由の1つには、こうした子が学習塾や語学教室に通っている割合が高いことが考えられる。父母が『大学・院卒』や生活程度が『上』の子どもでは、塾などに通っている割合がおよそ半数なのに対して、『中・高卒』や生活程度が『下』では、2割台から3割にとどまる。

家庭環境と子どもの勉強時間の関係をみたが、インターネットの利用時間についてはどうだろうか。インターネットについては、勉強時間とは逆に、親の学歴が高い子どもで、利用時間が短い傾向がある。父親が『中・高卒』の人では2時間44分なのに対し、『大学・院卒』では2時間28分、母親が『中・高卒』の人では2時間53分なのに対し、『大学・院卒』では2時間17分となっている。また、インターネットの利用時間が長いほど、勉強時間が短い傾向がある。

(2) 教育費をめぐる父母の意識

冒頭でも述べたとおり、日本では、経済協力開発機構（OECD）加盟国の平均と比べて教育費に占める家計負担の割合が高くなっている。中高生がいる家庭で、教育費が負担になっていることは、今回の父母調査の結果からも読み取れる。

父母に対して、学校の授業料や学習塾、習い事にかかる費用などの教育費は、「家計の負担になっている」と思うかどうかを尋ねたところ、『あてはまる（「どちらかといえば」を含む）』は、父母ともにおよそ7割にのぼる（図21）。

生活程度別にみると、『あてはまる』つまり

図 21 父母 教育費の負担
「教育費は、家計の負担になっている」

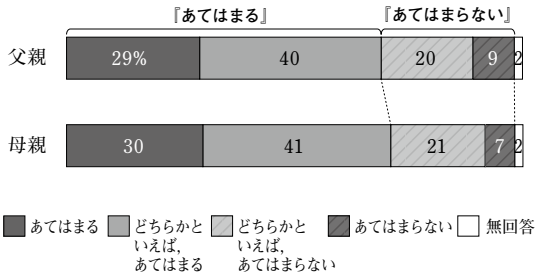
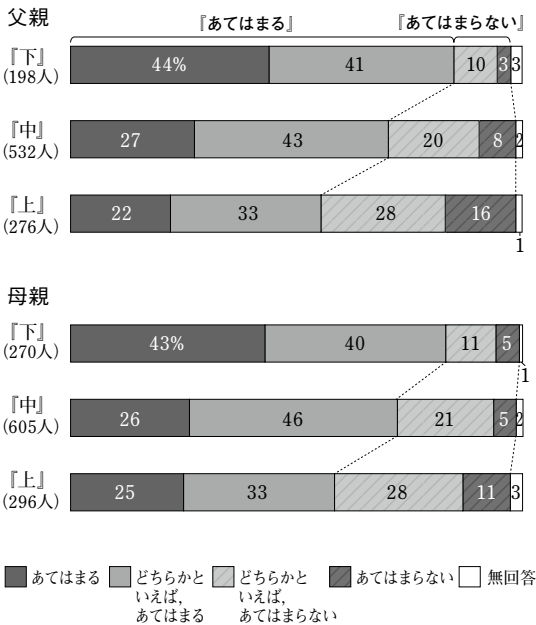


図 22 父母 教育費の負担「教育費は、家計の負担になっている」(生活程度別)



「教育費は、家計の負担になっている」は、父親では、生活程度が『下』の人が85%で、『上』の55%よりもかなり多い(図22)。母親でも、『下』が83%にのぼるのに対し、『上』では58%である。父母ともに、家計が苦しい世帯ほど、教育費の負担感が大きいことがうかがえる。

学歴別にみると、『あてはまる』つまり「教育費は、家計の負担になっている」は、父親では

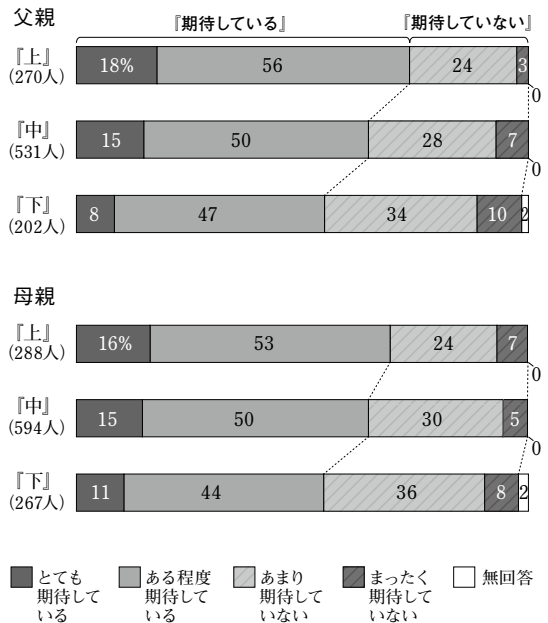
学歴にかかわらずおよそ7割で、差がみられなかった。これに対し、母親では、『中・高卒』の人が80%で、『大学・院卒』の65%よりも多い。『中・高卒』の母親のほうが教育費に対する負担感が大きいのは、日本では、夫婦のうち、女性のほうが家計をやりくりすることが多いからかもしれない¹²⁾。家計を預かるうえで、相対的に関心の薄い教育分野への支出に対して、心理的な負担を感じているのではないだろうか。

(3) 家庭環境で異なる、中高生の将来展望

生活水準が高い家庭の子で多い
『自分の将来に期待している』

前述のとおり、中高生の将来の進学意向は、父母の学歴や生活程度によって傾向が異なっている。それでは、中高生の将来展望は、勉強

図 23 中高生の自分の将来への期待
(父母の生活程度別)



以外の側面でも、家庭環境による違いがあるのだろうか。

中学生に対して、自分の将来に期待しているかどうかを尋ねたところ、『期待している(とても+ある程度)』と答えた割合は、父母の生活程度によって傾向が異なっている。生活程度が『上』では、『期待している』が約7割にのぼるのに対して、生活程度が『下』では約半数である(図23)。つまり、生活水準が低い家庭で育った子ほど、自分の将来への期待値が低いことがわかる。

生活水準で異なる、 将来の暮らし向きへの見通し

将来の見通しについて、もう1つ気になりな結果がある。中学生に対して、将来、世間一般からみて、自分自身の生活程度がどれくらい

になれると思うかを尋ねた項目である。将来の生活程度が『上(上+中の上)』と答えた中高生は、父親と母親の生活程度が『上』の場合、ともに48%と半数近くにのぼる(図24)。一方、父母が『下』の場合、『上』と答えた中高生は2割に届かない。父母の生活程度が低いほど、子どもの将来の生活程度の見通しも低い傾向があり、家庭環境によって将来展望が異なっている。前述の結果と合わせてみると、生活水準が低い家庭で育った子どもは、そうでない子と比べて、自分の将来に対して悲観的な傾向がみられ、いわば「希望の格差」が生じているのではないだろうか。

(4) 親の接し方で異なる、子どもの将来展望

親の学歴や生活程度によって、子の勉強への向き合い方、さらには将来展望が異なることをみてきたが、「家庭の社会経済的背景(SES)が低いからといって、必ずしも全ての子供の学力が低いわけではない」ことを示す先行研究もある¹³⁾。例えば、家庭での読書活動や生活習慣に関する働きかけ、親子のコミュニケーションなどが、学力にプラスの影響力をもたらす可能性があるという。また、「21世紀出生児縦断調査」を分析した報告によれば、「小学生の頃に体験活動(自然体験, 社会体験, 文化的体験)や読書, お手伝いを多くしていた子供は、その後、高校生の時に自尊感情(自分に対して肯定的, 自分に満足しているなど)や外向性(自分のことを活発だと思ふ), 精神的な回復力(新しいことに興味を持つ, 自分の感情を調整する, 将来に対して前向きなど)といった項目の得点が高くなる傾向が見られました」という¹⁴⁾。

今回の中学生調査では、子どもの読書活動

図24 中学生の将来の生活程度の見通し
(父母の生活程度別)

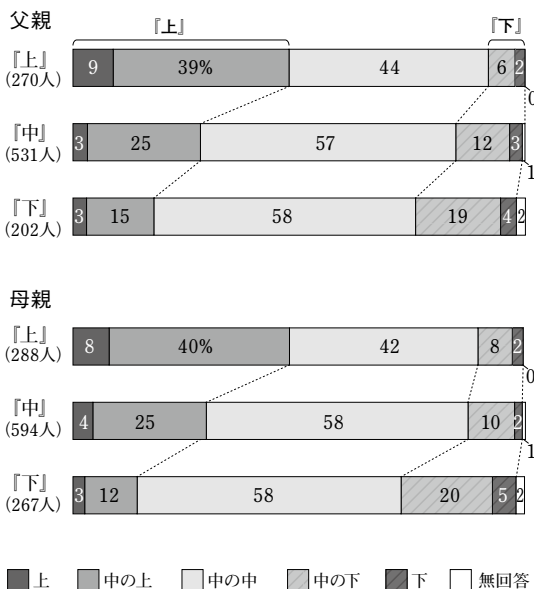


表2 勉強や将来展望について(母親による子への評価別)

		母親による子への評価(肯定評価の個数)		
		低(1個以下) ※1:359人 ※2:365人	中(2~3個) ※1:567人 ※2:577人	高(4個) ※1:202人 ※2:207人
学校外の勉強時間 ※1	ほとんど勉強しない	31	19	17
	『3時間以上』	8	15	19
進学の最終目標 ※1	『中学・高校まで』	14	11	8
	『大学・大学院まで』	47	57	64
自分の将来への期待 ※2	『期待している』	53	65	77
	『期待していない』	46	34	22
将来の生活程度の見通し ※2	『上』	22	33	40
	『下』	20	13	10

や体験活動、親による生活習慣に関する働きかけなどについては詳細に聞いていないが、父母からみた子どもの性格への評価について聞いており、こうした評価が、子どもの勉強意欲や自尊心に影響している可能性はないだろうか。例えば、父母が子どもの性格を肯定的にとらえることにより、子どもはそれを敏感に感じ取り、勉強や自らの将来に対して前向きに考えられるようになるかもしれない。

そこで、父母調査で、子どもの性格についての評価4項目で「根気がある」「思いやりがある」「自分から進んで何かをする」「自分で何でもやる」を選んだ個数が4個の人を「子への評価高」、2~3個の人を「中」、1個以下の人を「低」と定義して、子の勉強への取り組みや将来展望とのクロス集計を行った(表2)。日ごろから子どもとよく接している母親の結果にしぼって、詳しくみていく。子どもの性格を肯定的に評価している母親の子どもほど、「ほとんど勉強しない」が少なく、進学の最終目標として『大学・大学院まで』が多い。また、自分の将来に『期待している』や、将来の生活程度の見通しとして『上』と回答した割合が高い。回答数が少

ないため参考値ではあるが、生活程度が『下』の家庭の子どもに限ってみても、この傾向はある程度みられる¹⁵⁾。もちろん、勉強に意欲的な子どもだからこそ、親の評価が高くなるという逆の関係もありうるが、この結果は、不利な環境に置かれた子であっても、保護者の働きかけ次第では、逆境を克服

できる可能性があることを示唆しているのではないだろうか。

5. おわりに

以上、中高生とその父母の勉強や学校に対する意識について、世論調査の結果から概観してきた。今回の調査からは、多くの中高生が学校生活を楽しみ、父母も学校や教師に満足している様子がうかがえた。ただ、生活水準の低い世帯の親では、先生や授業内容について把握していない傾向があり、そうした家庭の中高生自身についても、勉強時間が短い。また、住んでいる地域によって、進学意向に違いがみられる。

無論、すべての中高生が大学への進学をめざすわけではなく、スポーツや趣味に没頭したり、将来に向けて自己研鑽を積んだりする子もいるだろう。ただ、生活水準の低い家庭の子どもほど、自らの将来に対して悲観的な見方をもつ傾向があるのは、気がかりである。先行知見や、今回の中高生調査の結果からは、親による子どもへの働きかけ次第で、子どもの自己

評価が向上しうる可能性がかいま見えるが、親の言動が子どもにもたらす影響については、引き続き世論調査の結果から探っていきたいと考えている。

冒頭でも述べたとおり、多くの子育て世帯がコロナ禍や物価高騰の影響を受けており、教育費の負担が保護者に重くのしかかっている。学費の負担ができずに大学進学をあきらめたり、奨学金を得て進学できたとしても、奨学金が返還できずに生活苦に陥ったりしている人々が相当数いることが指摘されている。中には、「奨学金の返還苦」が動機の自殺者も報告されている¹⁶⁾。子どもの貧困対策の推進に関する法律が2013年に成立して10年の間に、修学支援制度が徐々に見直され、入学金や授業料の減免、給付型奨学金の対象が拡大されつつある。ただ、制度を知らない対象者が相当数いるのに加えて、いま奨学金を返還している人への対策についても、待ったなしの課題であろう。

他方、日本の学校教育は、定められた学習指導要領のもとで進められており、その教育効果は、家庭環境の違いによる格差の縮小に重要な役割を担っているという見方もある。GIGA スクール構想のもとで、1人1台ずつ配備されているパソコンやタブレット端末の活用によって、個々人に合った「最適な教育」が進むことで、家庭間や地理的な要因による教育格差の是正効果を期待する向きもある。

子どもたちの将来が、親の学歴や家庭の経済力によって大きく左右されないような、機会均等な社会をどう実現していくのか、格差の是正や教育費用の負担について、さらに議論を高めていくことが必要ではないだろうか。

(むらた ひろこ)

注:

- 1) OECD (2023) Spending on tertiary education (indicator). doi: 10.1787/a3523185-en (Accessed on 27 August 2023)
<https://data.oecd.org/eduresource/spending-on-tertiary-education.htm>
- 2) 文部科学省 (2022) 「令和3年度子供の学習費調査」
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa03/gakushuuhi/kekka/k_detail/mext_00001.html
- 3) NHK放送文化研究所「今どきの中高生たち」
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/20221216_1.html
なお、2012年以前の各調査の概要は、NHK放送文化研究所編 (2013) 『NHK中学生・高校生の生活と意識調査2012 失われた20年が生んだ“幸せ”な十代』(NHK出版)を参照。
- 4) 2022年調査：生徒調査・父母調査ともに郵送法、2012年以前の生徒調査：個人面接法、1982～92年の父母調査：直接配付郵送回収法、2002・12年の父母調査：配付回収法。
- 5) 選択肢を囲う『』は複数の選択肢を合算している場合、「」は単独の場合を示している。また、『』の%は各選択肢の%を単純に足し合わせたものではなく、各選択肢の実数を足し合わせて再計算したものである(以下同)。
- 6) 文部科学省 (2023年) 「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」
https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf
- 7) 6) と同じ
- 8) 生活程度については、父母調査で「上」から「下」まで5段階で尋ねているが、このうち「上」と「中の上」を『上』、「中の中」を『中』、「中の下」と「下」を『下』としてまとめ、分析を行った。
- 9) TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) は、IEA (国際教育到達度評価学会) が1995年以降、4年ごとに行っている国際的な学力調査で、小学4年生と中学2年生を対象に、算数・数学および理科の到達度を調べている。
- 10) 松岡亮二 (2019) 『教育格差—階層・地域・学歴』(筑摩書房)
- 11) 10) と同じ

12) ISSP国際比較調査「家庭と男女の役割」2012の結果をみると、世帯の収入を「自分がすべて管理し、配偶者（パートナー）には必要なだけ渡している」と回答した女性は、日本で半数を超え、各国と比べてかなり多くなっている。

ISSP Research Group (2016). International Social Survey Programme: Family and Changing Gender Roles IV - ISSP 2012. GESIS Data Archive, Cologne. ZA5900 Data file Version 4.0.0. <https://doi.org/10.4232/1.12661>.

13) 耳塚寛明 (2019)「家庭の社会経済的背景 (SES) が困難な児童生徒への支援について—全国学力・学習状況調査と保護者調査の結果を用いて—」(文部科学省教育課程部会 (第114回) 配付資料より)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/1423048.htm

なお、SESはSocio-Economic Statusの略称である。

14) 文部科学省 (2021)「令和2年度 青少年の体験活動に関する調査研究結果報告～21世紀出生児縦断調査を活用した体験活動の効果等分析結果について～」

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_00738.html

15) 下表は、生活程度が『下』と回答した母親をもつ中高生の回答結果 (回答数が少ないため、参考値)。

表 勉強や将来展望について
(母親の回答が『下』の中高生・母親による子への評価別)

勉強や将来展望 (%)		母親による子への評価 (肯定評価の個数)		
		低 (1個以下) ※1: 94人 ※2: 96人	中 (2～3個) ※1: 115人 ※2: 120人	高 (4個) ※1: 44人 ※2: 48人
学校外の勉強時間 ※1	ほとんど勉強しない	42	30	18
	『3時間以上』	4	12	11
進学 の最終目標 ※1	『中学・高校まで』	23	21	16
	『大学・大学院まで』	33	43	50
自分の将来への期待 ※2	『期待している』	46	56	71
	『期待していない』	51	43	27
将来の生活程度の見通し ※2	『上』	9	14	23
	『下』	29	23	23

16) 警察庁 (2023)「令和4年中における自殺の状況」
<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>